

主 題：私は罪人として生まれた1

聖書箇所：ローマ人への手紙 3章9－20節

もう38年程前になりますが、私が初めて教会へ行ったとき、最初に私が教会の人から聞かされたことは「近藤くん、きみは罪人です。」という衝撃的なことばでした。初めて行った教会でそのようなことを聞かされて驚きましたが、もちろん、なぜこの人は初対面なのにそのようなことを私に言うのだろうかとも思いました。しかし、それは彼自身の勝手な決めつけでも、彼の辛らつな批判でもなかったのです。私のすべてを知っておられる主なる神の告発でした。あなたは罪人であると。確かに、ショックです。しかし、これがあなたへのまた、全人類への正当な告発であることをパウロは論証して行くのです。神はあなたのことを知っておられます。その神があなたはこのような存在であると言われるのです。

今日、私たちが学んで行く9節から、パウロは最初に、神が私たちをどのように見ておられるのか、私たちはどのような存在であるのかということに関して、二つのことを言います。その後、それが事実であることとということを実証して行きます。

☆神は私たちをどのように見ておられるか

1. 罪人である 9節

9節「では、どうなのでしょう。私たちは他の者にまさっているのでしょうか。決してそうではありません。私たちは前に、ユダヤ人もギリシャ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。」、神が言われることは、実はあなたは主なる神の前に汚れた者であるということです。思い出してください。もうすでに、パウロは神に逆らう異邦人やユダヤ人たちがさばかれる理由を述べて来ました。1：18－32までは特に異邦人たちの罪についてパウロは教えてくれました。神がいることを認識しながらその神を受け入れようとしない、栄光ある神を辱める、そのような罪を犯している、だれも神を神として崇めようともしないし、感謝もしないと。それゆえに、彼らの心はますますむなしく、無知な心は暗くなって行き、真理に対して鈍感になって行き、正しいところから外れてしまっている。異邦人は神の栄光を汚す者である、知恵があると言うけれど、やっていることは愚か者であることを証明している、偶像を造りその偶像を崇拜していると言います。ですから、1章では異邦人たちがどのように罪を犯し罪を重ね神の前にさばかれる者であるかということを見て来ました。2章では、自分は救われていると自負していたユダヤ人たちに対して、実はそうではないということを実証してパウロは教えました。彼らの救いの根拠はイエス・キリストを信じる信仰ではなく、自分たちの行ないであったり、主から与えられた特権だったのです。だから、あなたたちはさばかれる、まちがったところに救いの根拠を置いているからとパウロは言います。どんなにすばらしい特権をいただいようと、人や社会から称賛されるような良い行ないをしていようと、それらによって罪の赦し、救いを得ることは絶対にないと言います。イエス・キリストを除いては、だれひとりとして神の命令、教えを完璧に守ることのできる人は存在しないと言います。すべての人間は神の前に不完全であると。

2. 罪の奴隷である 9節

パウロはあなたは罪に対してまったく無力なものであると宣言します。9節に「すべての人が罪の下にあると責めたのです。」とあります。この「下にある」ということばは「～の力のうちに、～の権威の下に」という意味です。マタイの福音書8章で百人隊長がイエスに対して「と申しますのは、私も権威の下にある者ですが、私自身の下にも兵士たちがいまして、そのひとりに『行け。』と言えば行きますし、別の者に『来い。』と言えば来ます。また、しもべに『これをせよ。』と言えば、そのとおりにいたします。」(8：9)と言いました。つまり、私の命令に絶対的に服従する兵士たちがいるということです。そのようなことばがここで使われているのです。奴隷のことを考えたとき、奴隷は主人の権威と権力のもとに置かれています。ですから、パウロが言うことは、ユダヤ人もギリシャ人もすべての人が罪の下にあるということです。罪の赦しをいただいていない人はみな、罪の奴隷であり、罪の命令、罪の権威、罪の力、罪の支配下にあつて、その束縛から逃れることは決してできない、奴隷として生まれた者は奴隷として生き、奴隷として死んで行きます。自分ではどうすることもできません。だから、罪赦されていない人は完全に墮落した者であると言います。エレミヤ17：9には「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。」とあります。私たちはどうすることもできないのです。人の墮落はその人の知性に、また、意志に感情に行動に影響を及ぼしています。そのことを私たちはこれから見て行きます。パウロはそのことを私たちに教えてくれるのです。パウロは単に私たちは罪人です、私たちは罪の奴隷ですと教えたのではありません。私たちがいかに罪深い存在であるかということを実証して教えようと

するのです。私たちは自分は罪人であるということは認めています。でも、その罪がどれほど私たちの考えにおいても、選択においても、意志においても支配しているか、つまり、私たちの頭の先からつま先まですべてが罪に汚染されていると、そのことを教えるのです。なぜ、私たちはこのような考え方をするのだろうか、なぜ、私たちはこのように感じてしまうのだろうか、なぜ、私はこのような選択をするのだろうか、見事にその罪は私たちの細部にまでその汚染を広めています。罪の汚れは私たちの心の隅々にまで、芯に至るまで広がっていると、そのことをパウロは私たちに悟らせようとするのです。自分のいかなる努力や意志の力をもって、この墮落した自分自身を変えることはできません。自分を聖くすることもできないし、罪の力とその束縛に対して何もすることができないのです。

なぜ、パウロはこのようなことを教えようとしているのでしょうか？このことに気付かなければ、罪人が救いを備えてくださった神の前に悔い改めと謙虚な心で救いを求めて出て来ることはないからです。私たちの本当の罪深さと、私たちは自分で自分を救うことができないどうしようもない者だということに気付いて初めて、私たちは神のあわれみを求めようとするのです。だから、パウロはユダヤ人異邦人に関係なく、すべての罪人がこのことに気付くことを願い、その説明にページを費やして来たのです。

9節に「**すべての人が罪の下にあると責めたのです。**」とありました。このことは私たちはすでに1～2章のところで学んで、先ほど繰り返しました。パウロは「罪がある」ということをユダヤ人に対して異邦人に対して語り続けて来ました。彼らを責め続けて来たのです。その上で、彼はこのように言います。

「**では、どうなのでしょう。私たちは他の者にまさっているのでしょうか。**」と。ユダヤ人のことを話しているのでしょうか？確かに、そうかもしれません、ここでパウロが言わんとしているのは、ユダヤ人のことよりも救われている人々のことのようにです。なぜなら、これまで1章は異邦人のこと、2章ではユダヤ人のこと、救われていない人たちのことを話して来たからです。そこで当然、次は救われている人たちのことです。ユダヤ人の中の救われている人、異邦人の中で救われている人たちです。そして、私たち救われている者、クリスチャンたちも同様に罪人として生まれて来たのだということを忘れてはならないのです。かつては、私たちも神に逆らう者として汚れた者として、罪の奴隷として生まれて来たのです。ですから、パウロはここで、イエスを信じていない人も、すでに信じている者たちも、すべての者は罪人として生まれて来たのだということを明らかにするのです。

また同時に、救われている者たちにも救われていると自称していたユダヤ人たちと同じ過ちを犯してしまう危険性があります。それは自分たちが救われていることを誇り、そうでない人を見下しきばいてしまうという危険性です。見て来たように、ユダヤ人たちはそのように行ないました。私は天国に行ける、私は罪が赦されている、でも、あなたは？と…。パウロはこのみことばによって、私たち自身がどれほど罪に汚れ、罪深い者であるかを思い起こさせることによって、一人ひとりのクリスチャンが、神だけが私の誇りであり、神だけが自慢するに値するお方であるということをしかり確信するように、そのことを願って教えるのです。いったい、自分のことを自慢できるほど聖く正しい人がどこに存在するのか、そのことをパウロは読者に考えさせます。パウロは信仰者が神だけを誇り、神だけを自慢する者として生きることを願ったのです。これは、大切なことです。救われた私たちが自らの教育や家系、奉仕を誇っていても意味がありません。私たちが誇るものはただ一つです。パウロがガラテヤ人への手紙で言うように、「**しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。**」(6:14)、私はイエス・キリストだけを誇り自慢する、なぜなら、この方の恵みによって私は今の私になったからですと言います。すべての人は生まれながらに罪人である、どうすることもできない罪人である、父なる神のご好意をいただく資格のまったくない者であり、父なる神から愛され、慈しまれる価値のまったくない者、それが私たちなのです。

パウロは10節から、あなたは神の目にどのような者として映っているのか、二つの点を上げて説明して行きます。10-12節には「どのような性質をもっているのか」、13-18節には「あなたの言動に関して」パウロは語ります。この二つは密接に関係しています。私たちの心が悪ければことばも態度も悪くなるからです。パウロはこの10-18節を通して、いかに私たち信仰者が救われていない人たちと同じように、神のあわれみがなければ今の私になっていないか、そのことをしかり悟るようにと教えてくれるのです。クリスチャンのみなさん、大切なことです。あなた自身を正しく知ることは大切なことです。正しく知れば知るほど、あなたは神に対してより深い感謝をもって生きる者になるからです。なぜ、このような者が救われたのか、なぜ、このような私を神はすばらしく扱ってくださっているのか…。そのことに私たちがより強い確信を持つためには、神がどんなお方かを知るだけでなく、あなたが神の前にどのような存在として映っているのか、本当の自分に目を向けることが必要です。

☆人間は神の目にどのように映っているのか？

1. 性質が汚れている 10-12節

10節「それは、次のように書いてあるとおりです。」、パウロは私たちがどのような者であるかということ旧約聖書のみことばを用いて証明して行こうとするのです。6箇所のみことばを引用しながら、そのことを教えます。10-12節でパウロが教えることは「あなたは汚れた性質をもっている」ということです。10節の「**義人はいない。ひとりもない。**」ということばをもってパウロは始めて行きます。この10-12節で彼は、私たちはその性質においてどのように汚れているのか、六つのことを教えてくれます。

1) 汚れた者 10節

「**義人はいない。ひとりもない。**」と言います。これは詩篇14：1から引用されています。そこには「**愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。**」とあります。同じように、ダビデは同じことを詩篇53：1でも記しています。「**愚か者は心の中で「神はいない。」と言っている。**」と。「**義人**」とは神の前に正しい人のことです。

(1) **義人はいない**：ローマ1：18に「**というのは、不義をもって…**」とありました。「義」と反対のことばです。そこで、私たちが見た「**不義**」とは正義、道義に反することでした。人として踏み行なう正しい道、そこから外れているのが「**不義**」です。「義」とは正義であり、人として踏み行なう正しい道を歩んでいるということです。神の前に正しい歩みをするということです。歩むべき道を歩んでいる、神の前に正しいことを行なっている人と言うのです。そのような人は一人もないというのが、パウロが最初に言うことです。神の前に正しい人は一人もないと。反論したくなる人がいるかもしれませんが、聖書ではゼロだと言います。聖書を見て行くと、繰り返して私たちの汚れというものが教えられています。私たちは生まれながらに神に従うよりも自分の考えに従って行きたい不従順な者です。「**神の真理を偽りと取り換え、**」と1：25にありました。「**造り主の代わりに造られた物を拝み**」、つまり、私たち人間がして来たことは、神に従って行くよりも自分の好きなように、自分の考えに従って行くことです。だから、私たちは「**義人**」ではないと言うのです。

(2) **神よりも罪を愛する者**：また悲しいことに、私たちは神以外のものを神以上に愛する者として生まれて来ています。神よりも罪を愛する者として私たちは生まれて来ています。ヨハネ3：19-21でイエスはこのように言われました。「**光が世にきているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。：20 悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。**」、みな光のところに来ないと言います。そういう選択をしているのです。なぜなら、罪を愛しているからです。自分の快樂を満たすために生きて行きたいのです。邪魔されたくないのです。だから、パウロは言います。「**義人はいない。ひとりもない。**」と。私たちは神以上に他のものを愛しているからです。

(3) **神を信じようとしない**：ローマ書1章にもそのことは繰り返されていました。28節に「**また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、…**」とあります。みことばは私たちに繰り返して、私たちの問題は私たちが神を信じたくないとするところにあると言います。ヨハネ3：36にも「**御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。**」、御子を信じる者は祝福を受けるが、御子を信じない者には「**神の怒りがその上にとどまる。**」と言います。それでも人々は信じようとしないのです。そのようなさばきが下るということを考えもしないし、認めようとしません。私たちは神を信じない、信じたくない者として生まれて来たのです。

(4) **不法を行なう者**：神の前に罪を犯し続ける者です。Iヨハネ3：4に「**罪を犯している者はみな、不法を行なっているのです。罪とは律法に逆らうことなのです。**」とある通りです。神がしてはならないということ私たちが喜んでし、そして、神がしなさいということ私たちが徹底して拒否するのです。

(5) **利己的な者**：そして、私たちは神のことよりも自分の考え、自分の思いを最優先する利己的な者です。神が言われたことよりも自分の考えを優先するのです。それは私たちがクリスチャンになっても残っているものです。神のおことばがこうだと言っても、自分の信じたいこと、自分の考えが真実であってほしいと願う者です。イエスは「**だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。**」(マタイ16：24)と言われました。私たちはなかなか自分が捨て切れません。いつも自分が中心にいるのです。

「**義人はいない。ひとりもない。**」とパウロは言いました。多くの人がそれを聞いて、私はそんな悪いことはしていない、このような人たちに比べて私は勝っているし、私たちのうちで聖人と言われているあの人はいったいどうなるのかと言うかもしれません。神のお答えは「**義人はいない。ひとりもない**」です。すばらしいボランティア活動が称賛されてさまざまな賞をもらった人がいます。この世界から評価されている人たちがいます。しかし、神は「**義人はいない。**」と言われます。なぜでしょうか？神が言われていることは「**あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。**」(マタイ5：48)です。これが神の基準なのです。私たちはこれよりもはるかに低い基準をもって、この人はすばらしい人、あの

人は善意の人、慈善活動を行なっているあの人はすばらしい良い人だと、そのように言います。神が言われるのは、わたしが良い人と呼ぶ人は、わたしの命じていることを100%行なっている人、わたしがそうであるようにすべてにおいて完全な人であると言うのです。神の基準は余りにも高すぎて、だれもどんなに試みてもそれを越えることはできません。「**天の父が完全なように、完全でありなさい。**」と、もし、それができるならあなたは神の前に「**義なる者**」、あなたは「**義人**」だと言います。でも、そのようにすべてにおいて完全な者がいない以上、神が言われることは事実なのです。「**義人**」はいないのです。神の前に正しい人はいないのです。

そのことを旧約聖書の人々は繰り返して私たちに教えています。ヨブはこのように言いました。ヨブ記4：17「**人は神の前に正しくありえようか。人はその造り主の前にきよくありえようか。**」と。当然、その答えは「あり得ない」です。ダビデは自分の罪が示されたときこのように言いました。詩篇51：5「**ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。**」と、彼は自分の罪の責任を母親に転嫁したわけではありません。生まれながらに罪に汚れた者だと言っているのです。ソロモンは伝道者の書7：20で「**この地上には、善を行ない、罪を犯さない正しい人はひとりもないから。**」と言っています。また、ヨハネはIヨハネ1：8で「**もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。**」と言いました。神はもう分かっているのです。あなたのうちに罪があるということ。もし、罪がないというならあなたはうそつきだと言っているのです。だから、神は「**義人はこの世にひとりもない**」、イエス・キリストを除いて神の前に完璧に正しい人はひとりもないと言われるのです。それが私たちです。そのような者として私たちは生まれて来たのです。

2) 霊的に盲目な者 1 1 節

パウロが教えてくれる私たちの本当の姿は、1 1 節「**悟りのある人はいない。**」、霊的に盲目な者であったと言います。これも詩篇14：2から引用されています。「**主は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。**」、「**悟り**」ということばは一般的にもよく使います。というのは、仏教でも「悟り」ということばを使うからです。仏教では「迷いが解けて真理を会得すること」、自分と人生について正しい認識を得ることであると言います。でも、パウロがここで言っている「**悟り**」はそういうことではありません。「**神について知ること、神の教える真理を正しく理解すること**」と、そういう意味でこの「**悟り**」ということばを使っているのです。ですから、パウロはこのような「**悟り**」をもっている人はだれもないと言うのです。ソロモンは箴言9：10でこのように言いました。「**主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟りである。**」と。ということは、みことばが私たちに教えることは、すべての者を造られた主なる神を知ること、信じること、そのときに「**悟り**」を得ることです。そのときに初めて、私たちは神について知ることができるからです。私たちがイエス・キリストを信じて生まれ変わったときに、神が教えるその真理を理解することが可能になった、だから、生まれ変わった人たちは聖書のことばの真理が分かり始めるのです。IQの問題ではないのです。Iコリント1：21aで「**事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。**」と教えるように、どんなにこの世にあって知恵をもっていたとしても、その人は神を知ることにはないのです。霊的に盲目なのです。神がその人のうちに働いてくださることによって、神がその目を開いてくださることによって、私たちはこの真理に到達するのです。生まれながらの人間はだれも神について知ること、神の教える真理を理解することもできないのです。

3) 傲慢な者 1 1 節

1 1 節の後半に「**神を求める人はいない。**」とあります。人間は本質的に自分のことばかりを優先して神に逆らい続ける者であると、これも詩篇14：2「**…神を尋ね求める、**」の引用です。エレミヤはこのように言っています。29：13「**もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。**」と、つまり、もし、あなたが真剣にわたしを求めるならあなたはわたしを見つけると言うのです。神は私たちから隠れておられないのです。問題は私たちが真剣に求めないことです。神など必要としないのです。このローマ書ですでにパウロが教えてくれたように…。神を知ろうとしない理由のひとつには恐れがあるはず。もし、本当の神の存在を知って、その神を信じてしまうことになれば、今まで信じてきたものを捨てなければならないという恐れがあるからです。変えたくないし、変わりたくないのです。また、私たちが求めているものは非常に利己的なものです。私たちが求める神は非常に利己的な願いに基づいたものです。たとえば、自分たちにご利益をもたらしてくれる方、自分の願いや自分の欲しいものをかなえてくれる方を信じようとします。それが条件です。イエスを信じるならあなたは健康になって豊かになって…とそんな約束があるならみな信じます。ところが、聖書がいうことはその逆です。イエスを信じた後、あなたは病気になるかもしれない、迫害に会うかもしれない、苦しくなるかもしれない、それは私たちが遠慮したいことです、だから、私は信じないと。また、私たちが神を求めるのは必要があるときだけです。なぜなら、抱えた問題から逃避したいためです。だから、自分

を捨てて従うなどもってのほかです。人々は「私は神を求めています。私は真理を求めています。」と言っているかも知れません。しかし、それは自分に都合のいい神を求めているにすぎないのです。真剣に真の神を求める人に神は働かれ、神ご自身を示されると言います。私たちは自分が信じたい神を信じ、信じなければならない神を信じようとしないうちに私たちの問題があるのです。イエスはルカ12：56-57でこのように言われました。「偽善者たち。あなたがたは地や空の現象を見分けることを知りながら、どうして今のこの時代を見分けることができないのですか。：57 また、なぜ自分から進んで、何が正しいかを判断しないのですか。」と。神が私たちに言われていること、それはあなたは神に対して傲慢だということです。神に従順に従うべき人間が、こんな神であってほしい、こんな神であれば私は信じると、自らを神の上に置いている傲慢な者だと言うのです。そのような者として私たちは生まれて来ているのです。さばかれて当然です。神の怒りを受けて当然です。創造主なる真の神に指図するのですから。

4) 真理から外れた者 1 2 節

1 2 節に「すべての人が迷い出て、」とあります。すべての人が真理に背を向けて間違っただ道を歩んでいると言うのです。詩篇14：3の引用です。「彼らはみな、離れて行き、」とあります。イザヤ53：6に「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。」とあります。まさに、そのような生き方を私たちはして来ているのです。生まれながらに自分の好きなように生きているのです。ソロモンは箴言14：12でこのように言っています。「人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。」と。私たちは真理に耳を傾けようとしないうで、自分の好きなように、自分が楽しければそれでいいとしますが、神の警告はあなたの行き着くところは永遠の破滅である、死であると言います。パウロは私たちに生まれながらの私たち一人ひとり、クリスチャンであっても、汚れた者である、霊的に盲目な者である、また、傲慢なものである、真理から外れた者であると言います。そして、5番目にパウロが言うことは、

5) 神にとって無益な者

1 2 節の後半に「みな、ともに無益な者となった。」とあります。「価値がない」という意味をもったことばです。パークレーはこのことばに関してこのように言います。「このことばの一つの用法は酸っぱくなった、悪くなったミルクに用いられている。人間のキリストなき状態は酸っぱくなら無益な状態である」と。酸っぱくなったミルクは捨ててしまいます。価値がないからです。そのことを言っているのです。神を知らない人々、生まれながらの人々はみな神の前に無益な者、神にとって役に立たない者です。ですから、そんな人たちがどんなに頑張っても、神が与えてくださる御霊の実を実らせることはできないのです。どんなに成功しても、どんなに豊かになっても、どんなに自分の思い通りの生活をして、自分の欲しいものを手に入れたとしても、心の渇きを満たすことはできないのです。なぜなら、神は言われるからです、あなたはわたしにとって無益な者、価値がないと。神が用いることができないのです。そのような者として私たちは生まれて来て、そのような者として生きていると言うのです。

6) 悪に満ちた者

最後にパウロが言うことは「悪に満ちた者」だということを繰り返します。1 2 節「善を行なう人はいない。ひとりもない。」と、もう一度同じことを繰り返すのです。「汚れている」ということから始まり、最後に、あなたは悪に満ちた者であると言います。そして、「ひとりもない。」と言うのです。心の中にあってすべての点で完璧で正しく聖い人はどこにもいない、「義人はいない。ひとりもない。」と言ったパウロは、最後にもう一度、「善を行なう人はいない。ひとりもない。」と、このことを強調するのです。

考えてみてください、皆さん。このように平気で神の前に罪を犯し、罪を選択し、神に逆らうことを喜んで生きて来た私たち、神のご好意をいただく資格などまったくなかった私たち、どこを見ても、救われる価値があるとは言えません。そして、救いを備えてくれた神に、私たちは歩み寄ろうともしないのです。でも、驚くべきことは、こんなに汚れた私たちに対して、神が歩み寄ってくださったのです。

「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」(ルカ19：10)と、イエスはあなたがどれほど罪深い汚れた者であるかを知った上で、そのあなたを救うために来てくださったと言うのです。だから、恵みなのです。だから、私たちはこのイエス・キリストだけを誇ろうとするのです。神の前に喜ばれることは何ひとつできなかった私たちを、一方的に捜して一方的に救ってくださった、これが恵みなのです。これが私たちの偉大な神なのです。パウロはそのことを知って、そのことを心から感謝した人です。どうぞ、神はあなたにどんなに素晴らしい恵みをくださったのか、そのことを覚えて歩んでください。そのために、どんなにあなたが神を汚し、神を傷つけ悲しませてきた者であるかを覚えることです。そんなあなたを神は赦してくださった、この神だけに栄光があるように、それが救われた私たちの心からの願いではありませんか？